

## 中村遊廓における建築計画の類型

### THE TYPE OF ARCHITECTURAL PLANNING ON NAKAMURA YUKAKU

近藤正一\*, 早瀬幸彦\*\*, 麓和善\*\*\*, 若山 滋\*\*\*\*  
*Shoichi KONDO, Yukihiro HAYASE, Kazuyoshi FUMOTO  
and Shigeru WAKAYAMA*

We surveyed "Shinsenju", "Shinsansui", "Ginpa", and the other remained buildings of Nakamura-Yukaku, in order to analyze the characteristics of city planning and modern architecture in the age of Taisho to Early Showa which germinate modern urban thought.

The urban planning is modernistic although follow basic urban structure of historic Yukaku, in consideration of anti-disaster, hygiene, etc.

The floor plan of almost all buildings is typed 3 patterns according to functional matters on urban planning. "Shinsenju" and "Shinsansui" which are Japanese style have adopted western style everywhere, while "Ginpa" which is western style have been sukiya style at the interior.

*Keywords: Nakamura Yukaku, urban planning, architectural planning, general buildings of Yukaku, type*  
中村遊廓, 都市計画, 建築計画, 一般的妓楼, 類型

#### 1. はじめに

大正から昭和初期にかけての時代は、防災・衛生・美観等について、個々の建築物の性能だけでなく、一群の建築、あるいは地域全体で考えるという、ある意味での近代都市思想の萌芽期であった<sup>1)</sup>。大正12年、名古屋駅西方に開業した元中村遊廓<sup>2)</sup>妓楼群は、日本最後の大規模遊廓で<sup>3)</sup>、機能や防火対策を考慮した建築の規格性などの点で、当時の都市計画の思想を反映しており、大正から昭和初期のいわゆるモダニズム建築と都市の特徴を知ろうと貴重な研究対象である。しかし、これらの建築はその性質上、文化財として保存されることもなく、耐用年数に達した今日、ほとんど何の記録もされずに取り壊されているのが現状である。

今回、「新千寿」・「新山水」・「銀波」<sup>4)</sup>の三妓楼が丁度取り壊しの時期にあたり、所有者の好意で猶予をいただき、調査の機会を得た。現在は「新千寿」の南側1/3

のみ修理・保存され、他は調査後取り壊されている。

本稿では、文献史料をもとに中村遊廓の沿革を論じた後、全体の配置計画と個々の妓楼の平面計画の類型について都市計画的観点から考察し、典型的妓楼「新千寿」・「新山水」・「銀波」の平面構成と意匠について詳細に分析し、それらを総括して、中村遊廓における妓楼群の都市計画的・建築的特質を明らかにする。

これまで、内藤昌『角屋の研究』、平井聖他「金沢「ひがし」の廓(旧愛宕町)の町割と建築」等、優れた既往の研究がある<sup>5)</sup>が、いずれも江戸時代に成立した遊廓を対象としているのに対し、中村遊廓は大正末から昭和初頭に成立した近代的な廓であり、計画的にも意匠的にも近代的思想が反映されている点に本研究の意義がある。また、藤森照信らのグループ、および東海地方では瀬口哲夫らが「大正から昭和にかけての商業モダニズム建築について幅広く調査を行っており、中村遊廓の一部の

\* 名古屋工業大学社会開発工学科 助手・修士(工学)  
\*\* 名古屋工業大学社会開発工学科 大学院生・修士(工学)  
\*\*\* 名古屋工業大学社会開発工学科 助教授・工博  
\*\*\*\* 名古屋工業大学社会開発工学科 教授・工博

Research Assoc., Dept. of Architecture, Urban and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, M. Eng.  
Graduate Student, Dept. of Architecture, Urban and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, M. Eng.  
Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Urban and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.  
Prof., Dept. of Architecture, Urban and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

建築に関する解説もある<sup>6)</sup>。しかし、中村遊廓全体を対象とした体系的研究はなされていない。

## 2. 名古屋における遊廓の歴史

名古屋における遊廓には、まず慶長15年(1610)名古屋城築城時に徳川家康が設置した「飛田屋町廓」<sup>7)</sup>と、享保16~17年(1731~1732)七代藩主徳川宗春が設置した「西小路遊廓」・「富士見原遊廓」・「葛町遊廓」の三廓<sup>8)</sup>があるが、いずれも数年で廃止された。

その後、安政年間(1854~59)、玉屋町の宿屋笹野屋庄兵衛の上願によって、大須観音墓地北側が「北野新地」と称され、観音近くの宿屋が女郎屋を始めたのが中村遊廓の起源である。北野新地は明治7年に最盛期を迎え、明治9年、拡張のために大須観音の堂裏へ移転し、「旭廓」と改称した<sup>9)</sup>。

大正12年3月末日、旭廓は風紀上の問題から愛知郡中村へ移転し、「中村遊廓」となる。この移転は、中村地区側からの地域振興の要望もあり、愛知県・名古屋市の指導の元で行われたとされている。『大名古屋市西部地

図』(大正末頃、図-1)によると、中村に開業したのは150軒で、そのうち大須からの移転は88軒であった<sup>10)</sup>。この時期は全国的にも、一般大衆を対象にした娯楽を中心とした遊廓が増えており、中村遊廓でも揚屋として機能していた妓楼は一部の大店に限られていた。

中村遊廓では、開業当初は主に総2階入母屋造の建物が立ち並んでいた(図-2)が、昭和初期にカフェやダンスが流行した世相を受け、内部意匠やファサードを洋風に改装する妓楼が現れた<sup>11)</sup>(図-3,4)。全盛期は昭和12年で、娯家138軒、娯妓約2,000人を数えた。この年は名古屋で汎太平洋平和博覧会が開催されるなど、戦前の好景気にあたり、中村遊廓は繁栄著しく、当時東洋一といわれていた。

昭和18年10月には戦時体制に入り、妓楼は企業の寄宿舎に転用され、総数19軒、娯妓220人に縮小された。戦後は80軒以上が復業したが、昭和31年5月24日、売春防止法が制定されると、昭和32年4月の施行を待たずして、中村遊廓の灯は消えた。当時、「四海波」・「稲本」・「大観荘」等の有力妓楼は中京温泉株式会社を発足させていたが、立地条件などの点で時勢に合わず、そ

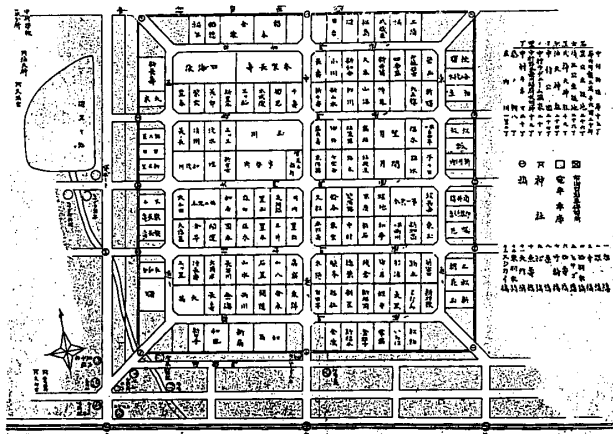


図-1 「大名古屋市西部地図」(大正末頃)



図-3 寿町(中日新聞所蔵 1935.10.12) 左より白馬、美の卵

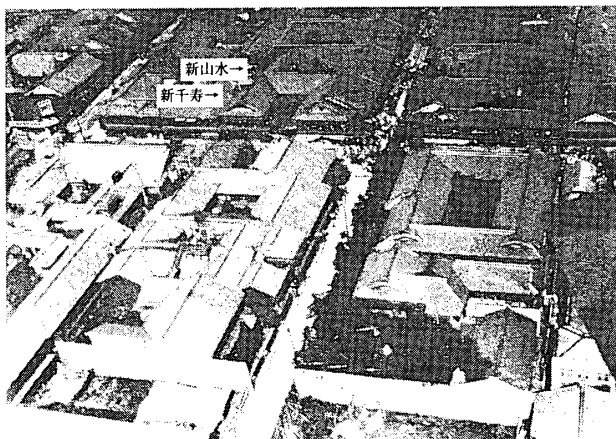


図-2 中村遊廓鳥瞰(中日新聞所蔵 1934.1.14)

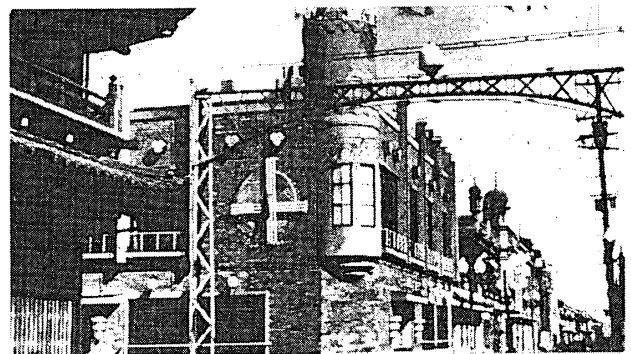


図-4 羽衣町(中日新聞所蔵 1935.10.12) 左より本松島、青々楼、中村楼

のほとんどは姿を変えつつある。現在、四海波はスイミングプール、稲本は料亭、大観荘は旅館となり、廓事務所のあった場所は大手スーパーに変わり、歓楽街の面影を残しつつも、街並みは新しい方向へ変化している<sup>12)</sup> (表-1)。

### 3. 中村遊廓の都市計画

中村遊廓は、名古屋駅西方およそ2kmの田園地帯に、一辺300mの正方形の敷地を埋め立て造成して計画された(図-5)。大通りは縦(南北)の大門通りと横(東西)の大門町筋の2本があり、大門通りは南方の太閤通の市電駅からの動線、大門町筋は東方の名古屋駅からの動線を意識している。北西のブロックには廓事務所、素盞男神社、大店が集中し、さらに遊廓の北西には県立診療所、遊里ヶ池が配置されていることから、北西部はいわば遊廓の奥の部分であったといえる。

また、廓の構造は、島原や吉原などと同様、縦1本、横3本の大通りを持った三筋構造<sup>13)</sup>を基本とし、さらにその外周を建物で取り囲み、四隅には廓の中心に向かう斜めの道を配している点が特徴的である。従来の遊廓では廓の入口を限定することによって囲郭性をもたせていた

が、この方法を採用することによって、中村遊廓ではすべての道を廓外に接続しつつ、外界と明確に分離している。一部の大店を除き、画地は一筆約410m<sup>2</sup>、間口約14m、奥行き約29mと統一されており、各街区は東西方向に弁道と呼ばれる裏動線を設けることによって、建物間の路地をなくしている。また、交差点には角切りが設けられており、これは送迎用の自動車の交通を意識したものと考えられる。過去に何度も繰り返してきた大火<sup>14)</sup>の反省から、防火対策のため、各街区は厚さ220mmから250mmのコンクリート壁が南北に延びて、二分されている。廓外周に幅約2mの堀が設けられているのも、遊廓の独立性を強調するとともに、防火の意味を持っていると考えられる(図-6)。これらは、ある意味で、内藤多伸のいう「市街建築としての衛生」や、保岡勝也の主張する「耐火安全な新市街」など<sup>15)</sup>、当時の近代都市思想にも通ずるものがあると思われる。

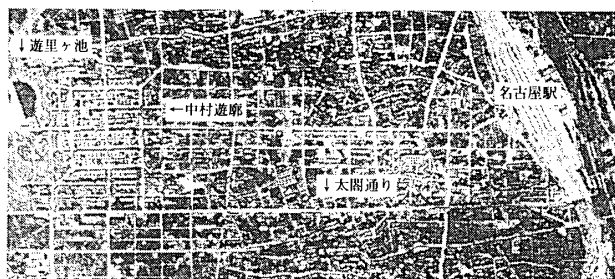


図-5 名古屋駅から中村遊廓周辺 (1936-42年頃)  
名古屋航空写真刊行会「空から見た戦後40年の変貌」  
航空写真センター 1987.4.1, 248頁より作成

表-1 名古屋遊廓関連年表

慶長15年 (1610)	徳川家康が「飛田屋町廓」を設置。名古屋城築城後初代藩主徳川義道が遊廓を禁止。
享保16年 (1731)	七代藩主徳川宗春が禁制を解く。9月「西小路遊廓」設置。
享保17年 (1732)	3月「富士見原遊廓」設置。9月「葛町遊廓」設置。
享保20年 (1735)	西小路遊廓一箇所にまとめられる。
元文4年 (1739)	八代将軍徳川吉宗、宗春に隠居を命ずる。西小路遊廓禁止。以後、百花(もか)が人目を避けて働くようになる。
安政年間 (1854~59)	宿屋徳野屋庄兵衛の上願で、「北野新地」が俳優の寄宿地に定められ、大須観音近くの宿屋主人が女郎屋を始める。
安政5年 (1858)	「娼妓渡世規則及び貸座敷渡世規制」発布、人身売買は禁止されるが、売春は認められる。
明治6年 (1873)	鷺尾隆聚が愛知県令で新地内に遊所を定める。
明治7年 (1874)	北野新地全盛期。40余軒の娼家。
明治9年 (1876)	1月大須観音の堂裏から堀川以東に遊廓設置の免許が下り、「旭廓」が開業する。廓内には女紅場(検診所)が設置される。北野新地は移転後自然消滅する。
明治36年 (1903)	7月9日旭廓の大火。沈水楼から出火し、18軒余りを消失。
明治38年 (1905)	旭廓全盛期。娼家173軒、芸妓112人、娼妓1,618人。3月22日旭廓貸座敷組合規約の制定。
明治45年 (1912)	7月愛知県知事深野一三が大正5年7月31日までの期日で南区稲永新田への移転を決定する。
大正2年 (1913)	1月22日大火。深川楼から出火し、72戸を焼く。旭廓、南区移転の問題について疑獄事件が発生し、移転無期延期の許可が出る。
大正8年 (1919)	明治橋から中村公園まで中村電鉄が開通する。
大正9年 (1920)	4月旭廓の愛知郡中村への移転が決まる。3月名古屋土地株式会社と旭廓土地株式会社との間に土地31,620坪の売買契約がまとまり、整地が始まる。
大正12年 (1923)	3月31日遊廓は大須から中村へ移転。4月1日「中村遊廓」開業。関東大震災、吉原などから多くの被災者が中村遊廓に移る。
昭和3年 (1928)	花魁道中が催される。
昭和8年 (1933)	二回目の花魁道中が催される。
昭和10年頃	この頃、洋風ファサードの妓楼が現われる。
昭和12年 (1937)	中村遊廓全盛期。娼家138軒、娼妓約2,000人。
昭和18年 (1943)	10月戦時体制に入り、多くの妓楼は企業の寄宿舎に転用され娼家19軒、娼妓220人に縮小される。
昭和20年 (1945)	新憲法公布、公娼制度が廃止される。
昭和21年 (1946)	貸座敷を特殊カフェと改める。娼妓は給仕婦と呼ばれるようになり、80軒余りが復業する。
昭和21年 (1946)	進駐軍指令官からの命で、進駐軍が登楼。間もなく禁止。
昭和30年 (1955)	四海波、稲本、大観荘等有力店が中京温泉株式会社を発足。
昭和31年 (1956)	5月24日売春防止法制定。
昭和32年 (1957)	4月1日遊廓は禁止される。

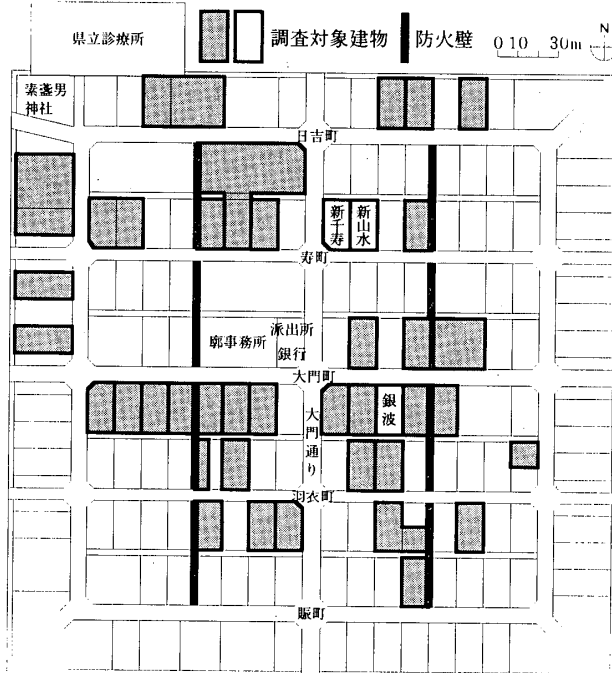


図-6 中村遊廓配置図(「糸野仙人祝喜中村遊廓見取図」などをもとに作成)

#### 4. 中村遊廓の一般的妓楼

中村遊廓は造成地に計画され、一斉に移転した近代的遊廓であるため、一筆125坪の均等地割がなされていた。中村遊廓成立当時、妓楼総数のうちおよそ90%は一筆分の敷地を有し<sup>16)</sup>、これが中村遊廓における一般的妓楼といえる。本節では、特に一般的妓楼の平面計画について分類し、その類型を明らかにする。

##### 4.1 対象妓楼

中村遊廓内において、当時の構造を残していると判断される建物は40件で、このうち35件はほぼ同規模である。残る5件はこれらの2~5倍と格段の規模を有しており、一般的妓楼とはいえないため、本稿では対象から除くこととする。

一般的妓楼35件のうち、遺構の詳細な実測調査を行ったもの3件、略平面・写真撮影程度の調査を行ったもの6件、ヒアリングにより略平面が確認できたもの1件、合計10件について略平面が明らかとなり、残る25件については調査協力を得ることができず、平面不明である。これらのほか、遺構は残存しないものの史料によって略平面の明らかになったものが6件ある。以上、略平面の明らかとなった16件をもとに以下の考察を行う。

##### 4.2 平面計画のパターン分類

一般的妓楼のうち、上記のとおり略平面が明らかとなった16件を比較すると、すべて2階建てで、中庭を有し、幅4~5尺の階段を3カ所に設け、房室は6畳15室以上で主に2階に配置され、廊下越しの中庭採光とし、建物間に路地はなく、水回りは弁道側に設けるなどの共通点がある。したがって、特に2階平面に着目したパターン分類によって、一般的妓楼の平面計画の類型を明らか

にすることができる。

基本要素を抽出し、その構成をパターン分類していくことによって、種々の複雑な平面計画を明快な形で類型化することができる。まず、略平面の明らかとなった16件の平面配置について、2階の平面構成を「房室と廊下」「房室」「廊下」の3種類のブロックで分割し、各ブロックの中庭周りの配置の仕方を3段階で分類する。パターン分類の過程を図-7に示す。

第1段階では、「房室と廊下」「房室」「廊下」の各ブロックで、2階平面全体がどのように構成されているかを表した。中庭の周りには少なくとも3方に「房室と廊下」があり、その奥には「房室」の配置されている場合が多い。中庭の南側および北側は、中廊下の両側に房室があるパターンが多く、前面道路に「廊下」が面している妓楼は少ない。

第2段階では、第1段階から手前と奥のブロックを省略し、中庭の周りだけに注目した結果、6パターンに分類できる。

第3段階では、第2段階から中庭の周りの通り抜けることのできない「房室」や「廊下」を取り除くことによって、コの字型、ロの字型、ニの字型の3パターンに集約できる。コの字型は10妓楼、ロの字型は5妓楼、ニの字型は1妓楼が該当していることから、一般的妓楼は中庭の周りに房室と廊下をコの字型又はロの字型に配置したものであったといえる。

#### 5. 一般的妓楼の特徴

中村遊廓の建築群の中でもほぼ当時のままの状態が残されていたが、近く取り壊される予定であった「新千

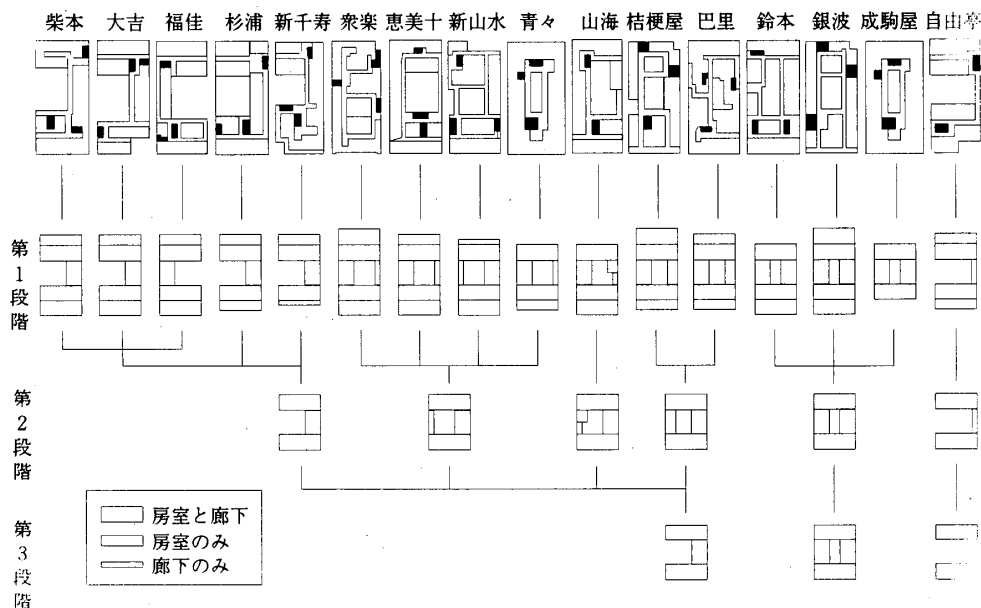


図-7 一般的妓楼平面パターン図

寿」・「新山水」・「銀波」について、詳細な実測調査を実施した。「新千寿」・「新山水」は中村遊廓における典型的な和風妓楼、「銀波」は典型的な洋風妓楼<sup>17)</sup>である。

本節では調査結果をもとに各妓楼の特徴について考察する。

### 5.1 新千寿

「新千寿」は大門通りと寿町筋の角地に立地しており(図-6)、総2階建、入母屋造り、数寄屋風の建物で、1階の窓にはすべて格子が入っており、中庭の大門通り側には数寄屋風の門がある。庇は桧皮葺きで、2階にはね高欄が取り付けられ、雲肘木(図-8)や、招き猫を象った隅肘木(図-9)など、細部意匠が凝らされている。基本的には数寄屋風の和風妓楼建築であるが、抽象模様のガラス窓(図-10)など、モダン・デザインも部分的に用いられている。南西の角は、交差点に設けられた敷地の

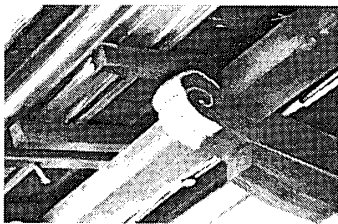


図-8 「新千寿」雲肘木



図-9 「新千寿」隅肘木

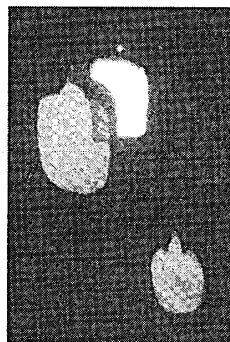


図-10 「新千寿」  
玄関ホール窓



図-11 「新千寿」写真見世

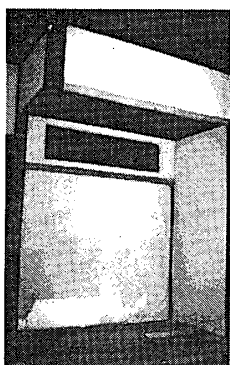


図-12 「新千寿」  
一般的な房室の床

角切りに合わせて欠けている。

入口は、玄関ホール南側および西側の二か所に設けられている。ホールの天井はネオン管で飾られており、ホールの東側が娼妓控室、西側が写真見世になっている(図-11)。1階に房室は1室しかなく、他の部屋は主人や仲居・女中達の控室と茶室となっている。一階廊下入口には建具があることから、1階奥の房室に入るためにはまず2階に上がり、奥の階段で下りる動線が考えられる。

2階には6畳の房室14室と8畳の広間がある。各部屋に押入れは付いていない。すべての部屋に床が設けられている。

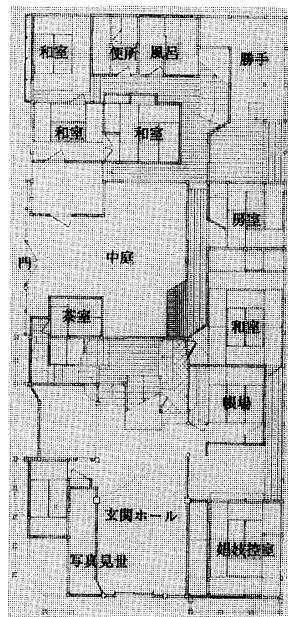


図-13 「新千寿」1階平面図

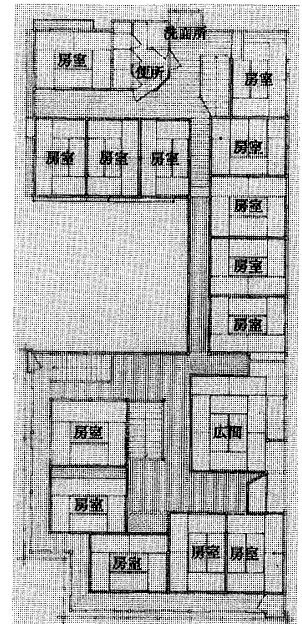


図-14 「新千寿」2階平面図

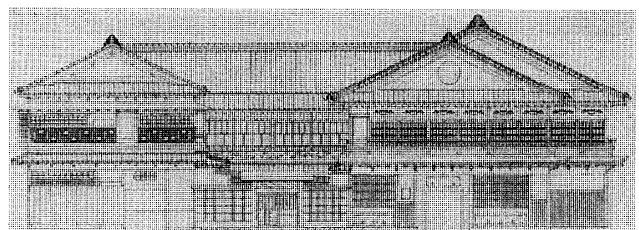


図-15 「新千寿」西立面図

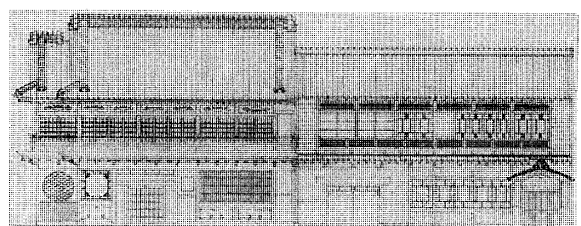


図-16 「新千寿」(左)・「新山水」(右)南立面図

が、ほとんどは簡略な釣り床(図-12)であった。廊下・階段は入り組んでおり<sup>18)</sup>、各房室を庵に見立て、街路的に扱っている。これは、すべての妓楼に共通した特徴で、横丁を連想させる。(図-13,14,15,16)

### 5.2 新山水

「新山水」は「新千寿」の東隣に立地しており(図-6)、総2階建て、切妻造りで、入口が正面に二カ所設けられている。西側の入口は楣が鳥居状になっており、東

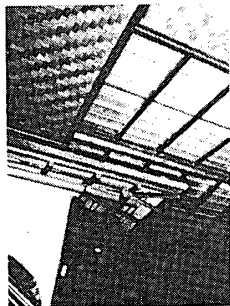


図-17 「新山水」  
西側玄関ホール天井



図-18 「新山水」中庭回り廊下

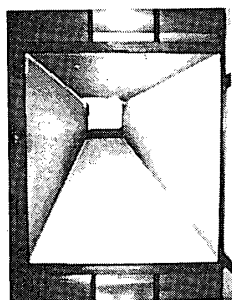


図-19 「新山水」  
房室天窓

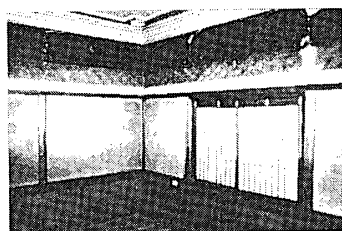


図-20 「新山水」洋風意匠の房室

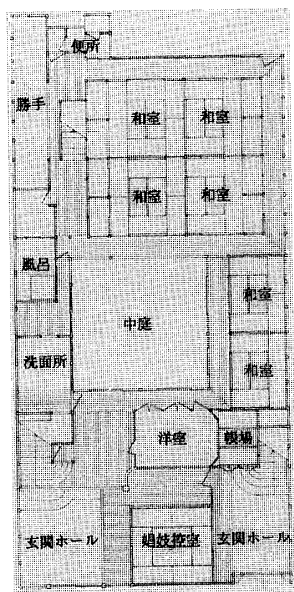


図-21 「新山水」1階平面図

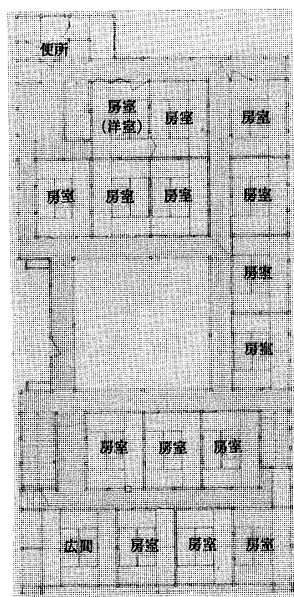


図-22 「新山水」2階平面図

側はむくり破風の庇がついている。2階の屋根に意匠は少ないが、窓にガラスが使われており、1階には洋風の窓が用いられている。入口腰壁にタイルが用いられている。

西側の玄関ホールは階段回りに数寄屋風の意匠(図-17)が凝らされており、東側に娼妓控室・待合室が配置され、北側正面に中庭を見ながら2階に上がれるようになっている。東側の玄関ホールは、1階の廊下に通じておらず、そのまま2階に上がる計画になっている。腰壁・床をタイル張りとし、天井にはシャンデリアが吊られ、装飾が凝らされているが、西側に娼妓控室と思われる小部屋があり、北側正面には帳場が配置されていること、2階の階段取り付けが裏動線的事から、東側の入口は主にプライベートな用途に使われていたと考えられる。

1階に房室はなく、客は入浴以外では奥の階段を使わない。また、他の妓楼においても「新千寿」や「新山水」のように、手前に二つ階段があるタイプでは、1階に房室を設けない傾向がある。

2階には6畳の房室が15室と8畳の広間が1室あり、中庭に巡らされた廊下は吹き放し(図-18)になっている。廻り廊下西側の扉は屋上物干し台に登る階段出口の名残である。北東の2部屋は平面計画上無窓室であるが、天窓(図-19)で採光している。北西の房室(図-20)は扉や窓に色ガラスが使われ、天井や壁が漆喰で洋風に仕上げられており、この妓楼の中では格の高い部屋であったと考えられる。中村遊廓では多くの房室が廊下越しの中庭採光で、ほとんど無窓の部屋も多い。これは、昼間でも夜の雰囲気を出す意味があったと思われる。(図-16,21,22)

### 5.3 銀波

「銀波」は中村遊廓の目抜き通りである大門町筋に立地しており(図-6)、総2階建て、切妻造りで、ファサードが洋風にデザインされている。中村遊廓では昭和初期に内部意匠やファサードを洋風に改装する妓楼が現れる。「銀波」はその典型的な例である。

ファサードは1階に丸窓、2階部分中央に半円、左右に四分の一円の大きな硝子窓を配し、周囲を直線と円とによる幾何学模様の色硝子と、モザイクタイルで装飾しており、当時、カフェなどにも取り入れられていた表現主義モダニズムの影響を受けたものと思われる。

玄関ホール(図-23)は壁面が漆喰と黒色の腰壁、色硝子のはめ込まれた円形・星形・蒲鉾形の窓、スタンドグラスやネオンなどの電飾器具等で構成されている。洋風の意匠が施されているのは階段ホール(図-24)と控室までで、それ以外の部屋はすべて数寄屋風となっている。1階は主に房主などの部屋になっているが、南西の階段に接して扇形棹縁天井などの意匠の施された部屋が2室

あり、房室として使用されたと考えられる。さらに奥には弁道に面して、風呂・便所・勝手などが配置されている。

2階には房室14室と8畳の広間が1室あり、すべて和室で、それぞれ異なる嗜好の数寄屋風意匠が施されている。廊下には部屋ごとに庇が取り付けられ(図-25)、連子窓や土蔵を模した海鼠壁(図-26)など、外部空間を連想させている。部屋では特に天井の意匠が凝らされており、傘天井(図-27)・扇形棹縁天井(図-28)・格天井・化粧屋根裏など、多様な表現がみられる。天井の意匠が凝らされるのは、島原の角屋など従来の遊廓建築にも共通する特徴で、特に房室では内部空間に占める天井の面積が大きく、室内意匠上重要であったと思われる。(図-29,30,31)

和風妓楼の「新千寿」には部分的に洋風意匠がみられ、「新山水」には洋風房室があるのに対し、「銀波」はファサード・玄関ホールこそ洋風であるが、内部意匠の大半は数寄屋風意匠であり<sup>19)</sup>、商業建築のデザインに対する表層的な捉え方の一端が現れていると考えられる。

## 6. まとめ

大正12年に開業した中村遊廓は、日本最後の本格的遊廓であり、次のとおり都市計画や建築計画上の特徴がある。

- 1) 外界と明確に分離するため、縦1本、横3本の三筋構造



図-23 「銀波」玄関ホール

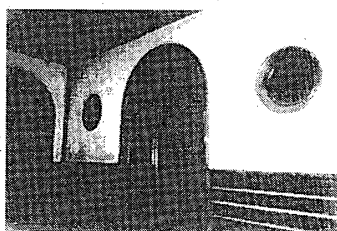


図-24 「銀波」階段ホール

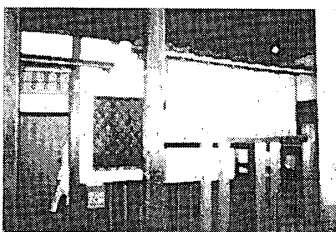


図-25 「銀波」  
2階廊下 (数寄屋風房室)

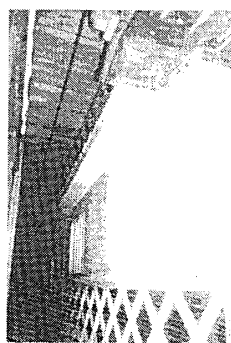


図-26 「銀波」  
2階廊下 (土造風房室)

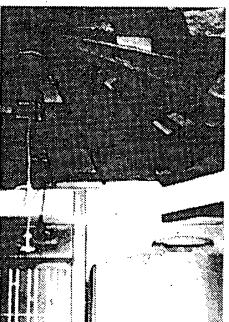


図-27 「銀波」傘天井

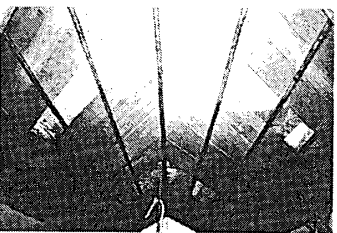


図-28 「銀波」扇形棹縁天井

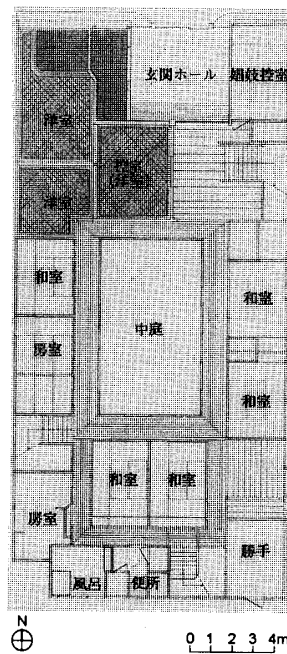


図-29 「銀波」1階平面図

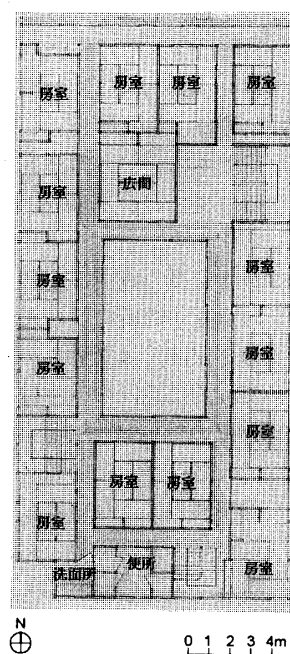


図-30 「銀波」2階平面図

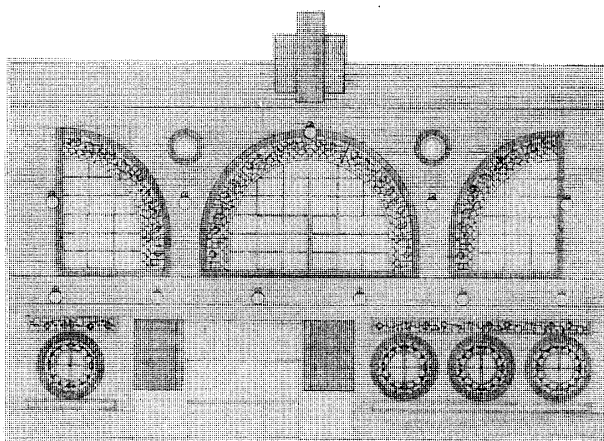


図-31 「銀波」北立面図

の外周をさらに建物で取り囲み、四隅に中心に向かう斜めの道を配している。

- 2) 送迎用の自動車交通を意識し、交差点には角切りが設けられている。
- 3) 防火対策を考慮して、堀、コンクリート防火壁によって区画されている。
- 4) 一般的妓楼の平面計画は、ほとんどが中庭の周りに廊下と房室をコの字型、口の字型に配置したものである。これは敷地、部屋の規模と数、階段数がほぼ統一され、通り庭はなく、水周りを裏動線である弁道側に設けるなど、近代的都市計画から定められた機能的諸条件が背景にあり、建築計画が中庭採光型に標準化したものと考えられる。
- 5) 角地の建物は交差点の角切りに合わせて計画されているため、隅部が欠けている。
- 6) 妓楼はすべて2階建てで、房室はほとんどが2階に配置され、1階に設ける場合は奥に配置されている。
- 7) 階段は3箇所設けられ、通常は玄関に2箇所、奥に1箇所であるが、「銀波」のように1階に複数の房室がある妓楼では、玄関に1箇所、奥に2箇所設けられている。
- 8) 数寄屋風の妓楼にもタイルやトップライトなど、洋風の意匠が随所に取り入れられており、一方、洋風妓楼の「銀波」はファサード・玄関ホール周辺までが洋風で、内部意匠の大半は数寄屋風である。
- 9) 部屋の外側に庇や連地窓・海鼠壁などを用いることで、各房室を庵に見立て、入り組んだ廊下・階段に外部空間のような印象を持たせている。部屋の内部意匠は特に天井が凝らされている。

以上のように、中村遊廓の都市計画は当時のモダニズムを反映した機能的な計画に基づいており、それが建築計画の標準化につながっている。意匠面でも洋風意匠が多く取り入れられているが、数寄屋風意匠と並列的に用いられている点が当時の大衆モダニズムの特徴であるといえる。

#### ・謝辞・

鶴飼病院院長鶴飼昌訓氏には、3妓楼の調査に際して多大なご協力をいただきました。深く謝意を表します。

#### ・註・

- 1) たとえば、当時の代表的な建築雑誌であった『建築世界』にも、都市の防災、衛生、美観に関する以下のような論文が掲載されていることから、大正後期の建築家は都市計画への関心が高かったと考えられる。  
内藤多仲「主張 市街建築の衛生」1916.5.10、内藤多仲「主張 市街建築の衛生(其二)」1916.6.10、片岡安「我が国建築の大改造期は迫れり」1918.7.10、佐野利器「都市計画の観念」1919.4.10、片岡安「都市計画と世論の喚起」1919.4.10、内田祥三「建築法規の概要」

- 1919.4.10、山崎静太郎「新都市の美観に就いて」1919.8.10、保岡勝也「東京市営住宅に対する希望」1919.9.10
- 2) 中村遊廓は、ほかに中村旭廓・中村名楽園の名称がある。妓楼の屋号も史料によって異なっており、本稿ではおもに「中村旭廓内明細図」に記載の屋号を用いている。
- 3) 明田鉄男『日本花街史』雄山閣出版 1990.12.20 pp.577-601「花街史年表」
- 4) 「新千寿」・「新山水」は現在の名古屋市市中村区寿町、「銀波」は中村区大門町に立地している。
- 5) 内藤昌「角屋の研究」中央公論社 1982.10、東京工業大学建築学科平井研究室(代表平井聖)「金沢「ひがし」の廓(旧愛宕町)の町割と建築」石川建築士No.72 1972.12、平井聖・中川原正平・濱口修身・松岡謙一「金沢・東の廓について-1(その沿革と町割)」日本建築学会大会学術講演梗概集 pp.1285-1286 1972.10、平井聖・中川原正平・濱口修身・松岡謙一「金沢・東の廓について-2(平面に対する考察)」日本建築学会大会学術講演梗概集 pp.1287-1288 1972.10
- 6) 藤森照信『建築探偵東奔西走』朝日新聞社 1988.5.30 pp.162-177、瀬口哲夫「都市・町の建築」グラフィック社 1981.1.25 p.68, p.104
- 7) 「中村区史」(中村区政十五周年記念協賛会 1953.5.20)によると、現在の名古屋市中区本町通、長者町通間、広小路通以北に立地していた。
- 8) 「中村区史」(前掲書)によると、西小路廓は現在の名古屋市中区山王橋付近、富士見原廓は中区給屋町、葛町廓は中区不二見町に立地していたとされる。給屋町と不二見町は隣町であり、富士見原廓と葛町廓は隣接していたこととなるが、「名古屋遊廓之図」によると、西小路廓と葛町廓が隣接している。「尾州名古屋西小路遊里図」・「尾州名古屋富士見原遊里図」・「尾州名古屋葛木遊里図」には3廓とも「元文元辰年橋町裏へ引きうつり」(尾州名古屋西小路遊里図)とあり、「隣接町村併合記念名古屋市全図」1921、にも橋町裏、すなわち山王橋付近に「葛町」の地名が残っていることから、3廓は開業後3~4年で西小路廓近くにまとめられたと考えられる。
- 9) 平野豊二「大須大福帳」名古屋双輪会 1980、服部鉦太郎「写真図説 明治名古屋の事物語」泰文堂 1978.12.6、大野一秀「大須物語」中日新聞談社 1979.3.10、に詳しい。
- 10) 大須からの移転妓楼数は、「大須大福帳」(前掲書)「立退前の旭廓」および、「大名古屋市西部地図」・「糸野仙人祝喜中村遊廓見取図」・「中村旭廓内明細図」に記入されている屋号の比較から推測した。ただし、当時の航空写真によると、未だ開業に至っていないものも見受けられる。
- 11) 横地清「中村区の歴史(名古屋区史シリーズ)」愛知県郷土資料刊行会 1983.12.16 pp.205-210
- 12) 「中村区史」(前掲書)、「中村区誌(区政50周年記念)」中村区政施行50周年記念事業実行委員会 1987.10.1
- 13) 「元和三巳年三月傾城町被仰付候節御書付」(『徳川禁令考』)により、六条三筋町が遊廓と定められ、寛永七年に移転した島原遊廓、その形式を踏襲した吉原遊廓の都市計画は三筋構成となっている。
- 14) 大須旭廓では明治36年と大正2年の2回、大火を経験している。表-1参照。
- 15) 内藤多仲「主張 市街建築の衛生」(前掲)、保岡勝也「東京市営住宅に対する希望」(前掲)
- 16) 「糸野仙人祝喜中村遊廓見取図」より算出した。
- 17) 「都市・町の建築」(前掲書)、INAXギャラリー名古屋企画委員会「名古屋のモダニズム 1920's~1930's」(INAX 1990.9.5)などに所収の当時の史料写真によると、少なくとも大門町の「銀波」・「東銀波」、日吉町の「千波」、羽衣町の「巴里」の4妓楼のファサードが類似している。
- 18) 「建築探偵東奔西走」(前掲書)では、大店「稲本」を対象に、遊廓建築の本質として、「中国趣味」とともに「迷路」を挙げている。一般的妓楼でも、迷路的というほどではないが、入り組んだ計画がなされている。
- 19) 3妓楼のほかに、名古屋市中村区大門町に立地する洋風妓楼「桔梗屋」の簡略な調査を行う機会を得、その内部意匠も玄関ホール周辺以外は数寄屋風であることを確認していた。「桔梗屋」はファサードをトタン張りに改修していたが、内部意匠はほぼ当時の状態を残していた。現在は看護婦寮として使用されている。

(1995年10月2日原稿受理、1996年5月10日採用決定)